

昭和55年2月1日 第1種郵便物認可
平成20年10月1日発行 毎月一回 1日発行
俳句雑誌 沖 第20巻第4号



俳句雑誌[おき]

4
月号

沖
発行所

緞帳

能村 研三

水戸の血

今瀬剛一さんが句集『水戸』で俳人協会賞を受賞され先月東京で授賞式が行われた。

紅梅は水戸の血の色咲きにけり
掲出の句が題名となったものだが句集のあとがきには、水戸は自分の育ったところであり、「好むと好まざるとにかかわらず私のなかには水戸の血が流れている」と述べている。「不器用で喧嘩っ早い、それで居て妙に情に脆いところのある」のが水戸の血だという。

まだ今瀬さんが「沖」におられたころ若手の会の「舵の会」に毎月水戸から東京に向われ熱い指導をいただいた。

現在主宰誌の「対岸」には、「能村登四郎ノート」を長年に渡り連載され、ライフワークとして登四郎研究をして頂いていることは大変うれしいことである。

今瀬さんは弟子の中でも、一番多く登四郎のもとを訪ねてくれた方で、「沖」の門をたたいてからは俳句を百句、二百句、時には、三百句を携えて来られた。これも約二十年間続いた。

きざはしにから足を踏む余寒かな

出代りの勤務シフトに加はれり

緞帳が遮る向かう春の闇

春寒し舞台係の雪駄かな

見番の踊り稽古や春障子

啓蟄や茶屋のなごりのポンプ井戸

行徳は塩で栄えし涅槃西風

行く春の雀色時長きかな

朧夜の色たたなはる中にゐて

神の山かのもこのもに木の芽吹く

登四郎もこうした熱心でひたむきな弟子が来るのを楽しみにしていた。た。「対岸」を出されてからは、出来立ての「対岸」の最新号を持参された。

登四郎の呆と口開け鳥雲に

掲出の句、かつて俳句を見てもらっている時の様子であったのだろう。登四郎の特長をよく掴んでおられる句である。こんな特長も肉親だと結構気がつかないものであるが、今瀬さんは身も心も登四郎に最も近づいて話が出来た人である。受賞が決まってから間もなく、今瀬さんが登四郎に報告をしたこと、今瀬さんが我が家を訪ねてくださった。仏壇に手を合わせながらしばらくの時を師と対話しているようであった。

能村 研三



心を千々に

林 翔

原点

「沖四五〇号記念号では、特集「林翔の世界」が組まれ、多くの方々が執筆して下さいました。主宰の諒解の下に企画された編集部の方々にも実際に執筆された同人の方々にも心から感謝しているが、ただ一人他結社から寄稿された橋本榮治氏の文章には特に感銘した。

梅満開心一つを千々にせむ
遠見なる橋は丹塗よ春の雪
雨のち晴赤い屋根には春の湯気
鴨の音を運ぶ風あり黄水仙

榮治氏は評論家としても独創性の強い人だが、それにしても翔文芸の原点とも言うべき釋道空歌集『海やまのあひだ』に着目されたのには驚嘆した。釋道空は文学博士、国学院大学教授折口信夫をまじの筆名。私が在学していた頃の国学院の学生は、深い浅いの区別はあっても、皆、折口先生ファンであつたように思う。文庫版の『海やまのあひだ』は常に私の所持品であり、暇さえあれば読み耽つたものである。今、三階の書庫まで同書を探しにゆく気力は無いが、開巻劈頭の歌は確か、

よその家の雛に軽く会釈せり

軒雫恋失ひし猫の泣く

さみどりの模様千変春嵐

春陰や無縁の墓に「空」一字

犬のため人も散歩し夕ざくら

ためらうてひらく一瓣紫木蓮

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人ありだと思ふ。

登四郎氏や私達が参加した同人誌は「装填」。今から見ると軍国主義的な題名のようなのだが、若さの象徴として付けられた名であろう。同人達は皆、自由を謳歌していたのだ。

行徳へ。通ふ夜船に降る霧の
そうそうと音明るかりけり

登四郎
などが記憶に残っている。

忘春のころ あはれに病みて
をり。能村登四郎を思はざらめや

三千夫

登四郎氏は先輩牛尾三千夫氏に、
こよなく愛されていた。右は登四郎
氏の病氣休学中に三千夫氏の詠んだ
歌。三千夫氏もすぐれた歌人であっ
た。

林 翔



蒼茫集



風 媒

上 谷 昌 憲

桜 楯

湯 橋 喜 美

寒桜くらき運河に鈍なせり
等伯の松の余白の寒気かな
大寒の底ひを灯油販売車
満開といへど臘梅影もたず
寒卵一割る一はもとの一
恋猫に風媒の闇募りけり

末広がり

藤 原 照 子

料峭や青年弓を捧げ持つ
牡丹雪寡婦といふ身に弾みつく
古民家のいのちを繋ぎ雪雫
老年と見て焚きくれし桜楯
炉火明り父祖の守りきし梁うねる
名山のなくて房州春めきぬ

父七十年忌

北 川 英 子

48 A 席 眼 下 雪 の 富 士
寒卵割りて齡の加はる日
あをによし新雪の上の鹿の糞まら
山の端に暁の織月結氷湖
節分や独りは省くこと多き
一点が末広がりに野火猛る

鳥籠の位置少しづつ日脚伸ぶ
春遅々と「ひかり号」また追ひ抜かれ
料峭や父の忌父を知るはなき
わが末生の家族写真や夜の朧
牡丹雪時間ゆつくり後戻り
八荒の明けや乳いる靄の湖

弥生 成宮紀代子

磨かれしまま料峭の車椅子
冬風や鯉ひしこ干場の湯気太く
光りものちよつと抓んで梅探る
きれい好き昂じてどことなく寒し
自転車に弥生の空気入れにけり
春光やきれいな英語通り過ぐ

双眸 秋葉雅治

縄飛びの同心円を競ひ合ふ
岬鼻に千の光源黄水仙
一天を統ぶる双眸春の鷹
春風は介護士わが背撫でゆける
マラソンが大路の余寒おどろかす
遍路衣先師・阿波の旅も法衣も適ふうたごころ

通奏低音 荒井千佐代

木枯しや船にひとつの渡し板
象の背のやうな稜線春立てり

寒波来て通奏低音よく響く
海沿ひの一本道を雛の客
春の雪ボレロ半音づつ上がり
カーテンにみどりご隠れ桃の昼

灯ともし頃 望月晴美

灯ともし頃スペインよりの初電話
起きて知る初雪なりし止んでぬし
春著着て己が日和と思ひけり
白セーター一途に炎ゆる胸かたち
白猫のよぎり降りだすぼたん雪
履けば決まりし雪沓の右ひだり

冬の櫂 辻美奈予

大気圏外真空といふ寒さかな
世界ぢゆう時間を止めて風花す
雪降るや川のおもては息ひそめ
病む父は冬の櫂のやうである
とこしへはうつくしき嘘ふゆざくら
底冷や祈るとき身を折らむとす

潮鳴集



がうがうと

内山花葉

雪降るや空気しづかに重くなる
湯火照りのぬれ髪ふいに雪崩音
体内の水がうがうと春隣
鳥籠を二段重ねに三月菜
暗証番号変へよと音声春寒し

受信せよ

林昭太郎

冬すみれ宇宙電波を受信せよ
どこからが帰路だつたのか探梅行
うすらひとさざなみとまたうすらひと
ライターを離れて点く火寒の明
春立つやピアノに籠る静電気

溶ける間

甲州千草

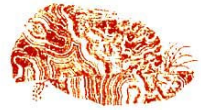
片手套失くした辺り良く通る
底冷やマイクの機嫌直らずに
日の回り来るまでの旬霜柱
黒服に溶ける間のあり春の雪
新機種と呼ばれて古りし海市立つ

しづり雪

高橋あさの

常磐木は鳥のこもり処しづり雪
少し風出て白梅の薄刃いろ
定位置の電車の乗り場日脚伸び
春北風たたら踏みつつ車夫ふたり
畦を焼く棒もてときに禁めをり

沖作品



能村研三選

ふと海を見たくなる時耳袋
犬の目の高さになつてみる雪野
湯ざめせぬやう火の色のバスタオル
鳥籠を高きに吊し成人祭
膝折つて選ぶ骨董春浅し
暁の雲をゆたかに青鷹
初東風の水尾しろがねに出漁す
飲み干してたましひ青し寒の水
ドーナツをふたつに割つて春隣
木の芽風ブックポストは児の高さ
近江より嫁が君とふ小幡でこ
おのれにも花びら餅のこちあり
軍鶏鍋の仕上げに落とす寒卵
根の国の音信めきて霜柱
福助のおじぎの前を嫁が君

長崎

小林 奈穂

市川

宮島 宏子

鳥居 秀雄

寒風に頭ぶつつけ直滑降
寒風にかしは手一つ癌家系
不意に鳴る自動ピアノやダイヤモンドダスト
もがり笛地球の悲鳴かも知れぬ
髪形も発想も変へ木の芽風
冬至湯の歪みし柚子の真黄色
先に葉を枯らしてゐたり霜の菊
枯草の一本の道潔し
雲開けしひかり耀ふ雪の嶺
水の面の張りを弛めず枯蓮
薄氷や昔が映る金盥
寒波来る響動もす波の華と散り
冬ざれの川に張りつく樹影かな
寒木の有り無しの芽にいのち満つ
初湯して身の烟りをり月日また

東京

藤原はる美

京都

おかたかお

千葉

峰 幸子

沖作品 15句選評

*
能村研三

らんのほのぼのとした春を待つ明るさが感じられ、春隣の感覚とよく響きあっている。

近江より嫁が君とふ小幡でこ 鳥居 秀雄

「小幡でこ」とは近江の琵琶湖の東の小幡の「土人形」のこと。今年の干支は戊子だが十二支の数えで最初に登場する「子（ねずみ）」は文字通り多産なことから子宝の縁起の良い動物とされ、十支の郷土玩具としても親しまれている。「嫁が君」はねずみの忌み言葉で、「夜目」がきくことから「ヨメ」「嫁」となったという説もある。この忌み言葉は本来正月三日に使うものである。人形にされた「ねずみ」は「嫁が君」と呼ぶ以外にも相応しい。

寒風にかしは手一つ癌家系 藤原はる美

癌体質は遺伝するともいわれるが、いわゆる癌家系の家族の中にいると、ちよつとした病気にも神経質になる。一句の中では多くが語られていないので、神社での祈願が肉親のためなのか、自分のためなのかかわからない。しかし寒風の中にあつて何か切迫した緊張感がただよってくる。

雲開けしひかり耀ふ雪の嶺 おかたかお

学校の校歌の一節を聞いているような句である。雪の嶺と言われる山は大方が高い山で遠望がきく。石川県の白山連峰や比良の高嶺などもその一例だが、雪が降り止んで雲の間から光が差し込み雪嶺が姿を見せると待ち遠しかった春の訪れを感じさせる。(以下略)

湯ざめせぬやう火の色のバスタオル 小林 奈穂

小林奈穂さんは長崎にお住まいの若手の方だが、市川で開催される中央例会に投句をされ、林翔先生の特選と私の準特選をとった句である。火の色のバスタオルを用いたところで、湯ざめをしない温かさがあるという科学的な根拠など全く無いのだが、関連があるかのように結びつけた感覚の鋭さに感心をした。

ドーナツをふたつに割つて春隣 宮島 宏子

ドーナツは祭日や祝い事と関連が深く、油脂や砂糖が貴重品だった頃は庶民が日常的に口にできるものではなかった。真ん中に穴の開いたドーナツは穴の向こうに何かあるようなおとぎ話の雰囲気があり、ロマンチックで子供たちが大好きなもの。そんな家庭的なドーナツを二つに割って分け合うという家族団